

子どもは親を選べない。でも、もし選ぶことができたなら… 幸せになれるかな。

2022年4月 眞鍋由比

冬のドラマの一番のお気に入り『ミステリと言う勿れ』でした。原作の漫画から既にファンだったのですが、久能整役 菅田将暉くんのもじゃもじゃ頭なのにきらきらした表情の変化。当たり前と思われていることに疑問を指し挟んでいく、ガチガチの思い込みから解放されるような興味深いドラマでした。

例えば、いじめがあったとき、日本だといじめられた子が転校しなきゃならなかったりするけれど、ヨーロッパなどではいじめたほうが問題ありとされて、カウンセリングを受け、謝罪する。それができないと学校から排除される。本当に、いじめられた子は被害者なのになんでよりつらい思いをしなければならないのか、おかしい、という話。

別の回では、親から虐待を受けていた子どもを救うために、自分も虐待されていた犯人が、子どもに親を焼きたいか、聞いてから火事を起こす話がありました。でもそうやって実の親が死んでしまったら…幸せになれるのか？子どもに選ばせること、そして虐待するような親でもなくなるということはどういうことなのか…と、とてもナイーブな話でした。

そう、子どもは親を選べない。親が子どもを選ぶことはあっても。だからこの本はもし子どもが親を選べたならというSF。

『ペイント』イ・ヒヨン著 イースト・プレス 2021

子育てができない親に代わって国家がたくさんの子どもを育てている近未来のお話。13歳になった子からホログラムでお見合いができる。最初は握手も許されない。何度も面接して、最後に合宿して決める。

親になるカップルはまず書類審査される。親にするのか、承諾も拒否も子どもが面接で決める。このセンターからの子どもを育てることになったら親は支援を受けられ、年金も上乘せされる。このようなセンターはここだけでなく、いくつもあるらしい。効率重視でどんどん面接させて養子縁組させるセンターもあるけど、ここは別。パクというセンター長が原則をきちんと守って、子どもを守って、自分の休憩スペースすら子どものために譲っているような、子ども第一のセンター長。誰よりも信頼している人。なのに僕の大切な二次面接の時にパクは休暇をとってしまう。

主人公は17歳で賢くいくつも面接を断って考える慎重派。同室のかわいらしい年少のアキははじめての面接がやさしいおじいさんおばあさんだったらしくとてもうれしそう。いろいろな子がいて、何度も家族になって、でも失敗してセンターに帰ってきている子もいる。

このセンター出身だと社会に出てから差別されたりする。国に育てられた（親に捨てられた）子どもだから。センター出身だとひたかくしにかくして生きていく。でも19歳になるまで親を選べなければタイムリミットでセンターを追い出され、自分ひとりで生きていかななくてはならない。

センターでは食物で摂る栄養は完璧に計算されていて、運動も適宜行わないと映画などの娯楽も与えられない。「健康」一番の生活。愛情以外はみなそろってる。

あなたがもしセンターの子だとして、親を選べたらどんな人を選びますか？
頭のいい人？美しい人？お金持ち？かっこいい人？
でも結局産みの親と違ってうまくいかないことはあるし、完璧な人間なんていない。

主人公が今回出会った芸術家のカップルは絵を描く、小説を書く、普段着の二人。普通面接の時はきれいによそ行きの服を着てくるのに。とても率直で、飾り気がなくて…型にはまらない、嘘のない、今まで見た中で一番気に入った人たち。彼はこのカップルを親にするのか？

巻末のあとがきで親に対する子どもの気持ちと親のこどもに対する気持ちについて書かれていました。もちろんいろいろな人がいるけれど、まあ、「大人だからって、みんなが大人っぽい必要ありますか」というのも真理だと思います。最低限の常識はわきまえなくちゃいけないけれど。

この作品のスピノフもあるそうです。5年後の少年たちの姿。「モニター」という短編だそうですが、早く読めたらいいな。